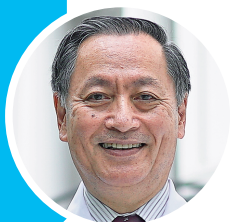


特集

研究・論文執筆についての 指南



編集責任

順天堂大学 医療科学部

峰島三千男

MINESHIMA, Michio

医療現場に携わる臨床工学技士は、患者の安全と医療の質の向上を担う重要な役割を果たしている。その実践の根幹にあるのは、科学的根拠に基づいた判断と、継続的な知識・スキルのアップデートである。論文を「読むこと」、そして「書くこと」は、この両者を支える重要な行為であり、すべての医療スタッフが心がけるべき行動の1つと考える。

本特集では、「研究・論文執筆についての指南」と題し、論文との向き合い方について専門の先生方により多角的に解説していただいた。

論文を読み解くスキルは、最終的に臨床にも直結する。新しい医療技術や治療指針は、まず文献のなかに現れる。その情報を自らの目で常に確認し、自分なりに吟味する力をもつことは、患者にとって最良の医療を提供することにつながる。

一方で、自ら研究を行い、成果を発信することもきわめて重要である。臨床工学技士が日々の業務で抱く疑問や工夫のなかには、新しい医療機器や技術の改良・開発につながる可能性が大いにある。現場で働く臨床工学技士だからこそ、医療機器の本質的な課題を正確に抽出し、改善や新規開発に向けた提案ができる。しかし、それを具現化できる臨床工学技士がいま

で極端に少なかったことも事実である。研究成果を論文化することで、個々の経験や知見が広く他者へと共有され、医療の質全体を底上げする原動力につながる。

本特集では、論文の種類や検索・読解方法、研究倫理、執筆・投稿の技術に加え、著作権や発表マナー、さらにはAIツールの活用まで、幅広いテーマを取り上げた。臨床現場で働く臨床工学技士だけでなく、養成施設の学生にも参考となるよう、入門的な視点から丁寧に構成されている。研究は学者のみの行為ではなく、誰でも「問いをもつこと」から可能である。

また、今回紹介されている「臨床工学技士養成施設卒業研究コンペ2025」の年間優秀賞の成果も、臨床現場を想定した小さな疑問や工夫から生まれたものが多く、臨床工学技士の可能性を改めて感じさせる内容が少なくない。実践的な視点から、臨床現場の課題がどのように研究へと発展し、そして論文化されていくか考えるうえで、たいへん参考になると思われる。

研究は未来の医療を支える礎であり、論文はその知識の橋渡しである。本特集が、読者の皆様の研究・論文活動の第一歩となり、臨床工学分野における新たな知の広がりを生み出す一助となれば幸いである。